

企画展 説経「おぐり」の世界 —説経節の広がり—

小栗判官を主人公とした説経「おぐり（をぐり・小栗）」は、『苅萱』『俊徳丸』『山椒大夫』と並んで、代表的な説経の演目である。

小栗の物語は、説経になる以前に説話として流布しており、その流布にあたっては、特に時宗の聖が関与していた想定されている。室町末頃成立の『鎌倉大草紙』には、小栗判官伝説の原型である小栗小次郎と遊女照姫の物語が載っているが、これもおそらくは、忠実な史実ではなく、既にあった小栗の説話が流入したものと考えられている。現在も、茨城県筑西市の小栗、神奈川県藤沢市と横浜市の六浦周辺と相模原市、岐阜県大垣市の墨俣周辺と青墓、和歌山県の熊野などに小栗と照手の伝説が残っているが、各地の伝説はそれぞれに異なり、しかもその内容は、説経とその派生文芸からの影響だけでは説明しきれない要素がある。

一方で説経の「おぐり」からも多くの派生文芸が生まれている。特に浄瑠璃や歌舞伎では、小栗物と纏めて称することが可能な、様々に脚色された作品が上演されてきた。浄瑠璃では近松門左衛門作の『当流小栗判官』を経て、竹田出雲・文耕堂合作の『小栗判官車街道』成立するが、この作品が歌舞伎の小栗物へもたらした影響は大きい。歌舞伎では江戸時代から明治時代を通じて『小栗判官車街道』の影響を受けて成立した『姫競双葉絵草紙』が度々上演されている。そして現代、武智鉄二監修の『小栗判官車街道』（昭和49年）、三代目市川猿之助（現猿翁）による『当世流小栗判官』（昭和58年初演）やスーパー歌舞伎『オグリ・小栗判官』（梅原猛作、平成3年初演）と小栗の物語は舞台の上で今も生き続けているのである。

説経「おぐり」関連書

・おぐり判官

志水文庫

説経 九行 半紙本 享保三年刊

一丁表に序文があり、「享保三(以下欠)」と記されている。序文末尾は欠けているが、これは佐渡七太夫豊孝の正本である。

・小栗判官

志水文庫

説経祭文 薩摩若太夫正本 六行 江戸吉田屋小吉刊

「小栗判官」の内、万屋の段上下・清水の段・買物段上下・車引段・矢取段上下・対面段上下と「三庄太夫」の内、安寿姫對王丸兄弟道行段・罪物語の段の十二冊を合冊

・小栗判官

志水文庫

説経祭文 薩摩若太夫正本 六行 江戸吉田屋小吉刊

馬誉の段上下・曲馬の段上下・万屋の段上の五冊を合冊

・当流小栗判官

志水文庫

十行 半紙本 近松門左衛門 作 京都 山木九兵衛刊

近松門左衛門による小栗判官の物語。初段「相模が原小栗配所」「横山屋敷」、二段「横山屋敷」「馬場」、三段「小栗の屋形」「相模浦」、四段「藤沢の門前」「美濃青墓の宿万屋」「照手姫車の段」、五段「青墓の宿万屋」「藤沢寺」

話の筋は説経に近いが、鬼王鬼次兄弟や後藤左衛門を活躍させ、後藤の妻きさらぎを新たに登場させ、またその他の登場人物もより魅力的に描くなど、近世の浄瑠璃らしい増補改作が施されている。一方で説経の中では一つの山場であったであろう閻魔王の前の場面は割愛されている。

・小栗判官車街道

志水文庫

七行 半紙本 竹田出雲・文耕堂作 元文三年八月十九日竹本座初演

近松作の『当流小栗判官』をへて作られた浄瑠璃。小栗と照手よりも、周囲の登場人物に焦点が当てられる。説経の「おぐり」や近松の浄瑠璃とは異なり、小栗は毒殺されない設定で、毒を飲んだのは、身替わりにたった不寝兵衛という人物であった。近松の浄瑠璃ですでに、閻魔王の前の場面は描かれなくなっていたが、本作はさらに「蘇り」という設定そのものを無くしてしまっているのである。また横山の長男の太郎が、作り阿呆から本来の姿に戻る部分は好評であったらしく、後に歌舞伎『姫競双葉絵草紙』に取り入れられる。

・姫競双葉絵草紙番付

志水文庫

表紙に「叢帖」と書された番付集の一葉。『姫競双葉絵草紙』は、歌舞伎の小栗物の代表的な演目であり、度々上演された。

この番付は、文久元年一月に大坂堀江芝居で上演された際のものである。座本は尾上卯三郎、三桝梅舎（風間八郎他二役）、中村駒之助（小栗判官他二役）、山下金作（照手姫ほか二役）、三桝源之助（横山太郎ほか二役）ほかの出演。

・春鬼驪小栗外伝

三枚続き大判錦絵 二代目貞信

志水文庫

明治十四年一月大阪角の芝居上演の歌舞伎。風間次郎役の実川八百蔵・小栗判官役の市川右團治・照手姫役の実川正朝。

『春鬼驪小栗外伝』は、『姫競双葉絵草紙』の改作で、この明治十四年が初演。『劇場珍報』42 にあらずじが書かれているが、非常に複雑な筋立てとなっている。

ここに描かれているのは、大詰の「熊野那智山」の場で、那智の滝の滝壺から餓鬼病みが平癒した小栗助重が姿を現し、浄阿上人の言葉通り、熊野権現の奇瑞で病が癒えたことを喜ぶ場面である。大詰めの直前の六幕目で、小栗は敵によって箱根の地獄谷に蹴落とされて、髪が抜けあばら骨が顕れた餓鬼病みの姿となる。浄阿上人は、照手に綱手車に小栗を乗せて熊野へ行くよう告げるという場面がある。

発端 管領足利持氏館の場 佐々女谷観音堂破却の場

序切 筑波山半覆に風間八郎妖術譲受の場

二幕目 鎌倉鶴ヶ岡の場 名武篤光暗殺の場

三幕目 小栗満重館の場

四幕目 相模国権現堂村の場 横山大膳館の内 相州六浦浜の場

五幕目 漁師小助住家の場 相合川長堤

六幕目 箱根峠の場 箱根山中の古御所 箱根地獄谷夫婦奇縁因果車の場

大詰 熊野那智山

・謡曲「小栗」

伊藤正義文庫

平松家旧蔵福王流番外謡曲八百十番本

写本 六十七冊の内の一冊 「和田酒盛」「堪海」「現在松風」「現在実盛」「琴」「金毘羅」「小栗」「髭切」「法花会」「鳴渡」

番外曲「小栗」は、別名を「照手」ともいう。貞享四年版『能訓蒙圖彙』所収の名寄せに題名が見える。シテは照姫、ワキは横山、ツレ（ワキツレか）が横山の家来、小栗は「小栗」と記される。内容は、説経の「おぐり」ではなく、『鎌倉草紙』に近い。照手ではなく、小栗と馴染みの遊女照姫が、横山の小栗毒殺の企てを察知し、小栗に知らせるといいう物語である。

・新板おとりくどき

刊本 半紙本 一冊 貞享元禄頃刊か

京都の祇園辺りで流行した踊歌を集めた寄本。センターでは二本所蔵しているが、その内の一冊（左側は、版面の様子や虫喰いの位置から、古典文庫本の底本と考えられる。収録されている歌謡の中に「おぐりづべつくかうやく売」という曲がある。

中むかしのことかとよ。よこ山殿のひとり姫てるての前と申せしは。いふにやさしき御すがた。おぐりはんぐはん聞および。みぬ恋にあこがれて風の心ちと成給ふ。あまりにみるもいたはしく。御内に有しことう左衛門御文を給はりて。小間物うりにさまをかへ。れんじやく取てかたにかけ。よこ山殿のもんぐはいを。かくこそうりて通りけり。

（以下物売りの詞）

・千手観音像 図版

志水文庫

紙本墨摺 江戸中期作か 裏面に「弘法大師御筆 本尊千手観音御影」と墨書

照手姫は、両親が下野国日光山に参詣し照る日月に申子して生まれた。日光山の本尊は、千手観音・阿弥陀如来・馬頭観音である。物語では、照手受難の際には、影身に添っている千手観音が助けの手をさしのべる。例えば松燠しにされると、「なにか照る日月の申し子の事なれば 千手観

音の影身に添ふて御立ちあれば そつともけむうはなかりけり」、青墓宿の長に十六人分の仕事をさせられると、「なにか照る日月の申子の事なれば 千手観音の影身に添うて御立ちあれば いにしへの十六人の下の水仕より 仕舞は早う措いてある」となるのである。

・蓮華王院千手観音菩薩像

志水文庫

紙本墨摺 文政十二年版 京都三十三間堂の千手観音像 下段に以下の文字

廣大慈悲 拔苦与楽 杲日麗天 無幽不燦 茲写洛東蓮華王院一千
尊容印施 伏願与衆瞻礼同証円通 文政己丑孟夏 紀広成敬写

・鞍馬山毘沙門天像

志水文庫

紙本墨摺 江戸末制作か 軸部紙背に「奉開眼鞍馬寺八勸進沙門其純」と書き入れがある

小栗は鞍馬寺の毘沙門天の申子である（本によってはこの記述なし）。掲出の図は、その鞍馬寺の毘沙門天に脇侍として善(ぜん)膩(に)師(し)童子と吉祥天女が描かれている。鞍馬寺の毘沙門天像には、毘沙門天・善膩師童子・吉祥天女三尊一具のものがあり（国宝指定）、それを写した版画である。

十王図とその関連資料

毒殺された小栗とその家来十人は、閻魔王の前に引き出される。家来達の嘆願により、土葬された小栗は甦ることができたが、十人の家来は火葬されていたため甦れない。閻魔王は十人の家来の忠心を愛でて、彼らを十王として斎(いわ)うことにする。このことは、絵巻、説経正本、奈良絵本いずれにも描かれる。絵巻の本文は以下の通り。

なにしに十人の殿原達 悪修羅道へは落すべし われらが脇立に頼まんと 五体つつ両の脇に十王 十体とお斎ひあつて 今で末世の衆生をお守りあつておはします

十王とは、冥界の十人の王のことである。人は死ぬと、初七日から三年忌に至るまでの間に、この十人の王の前を通過し生前の所業を裁かれる。この十王信仰に基づく経典が、「十王経」である。唐末に中国で成立

した『預修十王生七経』等の経典は、平安時代には日本に伝来した。さらにこの中国伝来の経典を元にして、日本で成立したのが『地藏菩薩発心因縁十王経』（『地藏十王経』）である。日本における十王信仰では、十王にそれぞれ本地仏が設定されているのが特徴である。

十王信仰や「十王経」は、日本の文芸に様々な形で影響を及ぼし、様々な形で受容される。小栗の物語で、十人の家来を十王に斎うのもまた、そうした受容の一つである。ただし、「十王図粉本」で紹介するとおり、本来、閻魔王は十王の一であり、閻魔王の脇には、左右に司命と司録が控えるのが一般的である。「十人の家来」と「地獄」・「閻魔王」が結びつき、「十王」が発想され、そこから「閻魔王とその脇侍の十王」という構図が生まれたと思われるが、これが小栗の物語特有であるのか、あるいは何か元になるものがあるのか。疑問を抱きつつも、現時点では保留とする。

・浄福寺十王図粉本

志水文庫

十王の姿は、中国・朝鮮で十王図として絵に描かれるようになる。その中でも、特に中国宋代の十王図が多く日本に伝わり、日本において新たに十王図が展開していくこととなる。日本で製作された十王図は、中国の図を参考にしつつ、そこに日本特有の本地仏を付け加える形をとる。

掲出の「十王図粉本」は、室町時代の絵師土佐光信筆の十王図（京都浄福寺蔵）の粉本。原本の忠実な模写と、各所に記された色指定の詳細さが注目される。享和年間の書写。絵師は不明である。国会図書館蔵の版本『仏説地藏菩薩発心因縁十王経』見返しには勝部如春斎が写した土佐光信図の閻魔王像が載っている。しかし浄福寺蔵の十王図と比較すると、この閻魔王像は、閻魔王と秦江王を合わせたような姿になっている。

浄福寺本十王図は、裏書や『実隆公記』の記述等によって、延徳元年（一四八九）後土御門天皇の逆修のために描かれたもので、後奈良天皇によって浄福寺に下賜されたものであることが判明している。この浄福寺本の元になったのが、藤原行光匹の二尊院蔵十王図（重文）である。

二尊院系統の十王図の特色の第一は、『地藏十王経』では二七日に説かれている「奈河津（三途河）」と「奪衣婆」を、初七日の秦広王図に描い

ていることである。これは、日本では古くから「三途河と奪衣婆」が冥途に入る以前の情景として理解されていたため、初七日の場面にこれらを描くことにより、日本の伝承を取り入れようと努めたものと考えられている。また浄福寺本には、全体に和風の景物が描き込まれており、宋元画の模倣に始まる十王図を和様化する工夫とみる指摘もある。もう一つの大きな特色は、第七の太山王が甲冑姿に描かれていることで、これは敦煌本『十王経図巻』系の図を参照したものと考えられる。

・ **仏説地藏菩薩発心因縁十王経** 志水文庫
大本一冊 近世初期刊

略して『地藏十王経』『十王経』等。中国で成立した『預修十王生七経』に基づいて日本で成立した。本書はその絵入り刊本。国会図書館蔵本には、表紙見返しに閻魔王の図と「閻魔王像 土佐光信圖 如春斎謹寫」の記載があり、巻末には「皇和文禄三年甲午七月 沙門得仙加圖板之」とある。ただ、この閻魔王の図は浄福寺蔵十王図の閻魔王と秦江王を合わせたような姿に描かれている。

・ **仏説十王経（首書十王経）** 志水文庫
大本一冊 貞享五年 江戸 中川五郎兵衛刊

『地藏十王経』に詳細な頭注を付した本。跋文に「沙門覚林敬誌」とある。外題は「鼈頭 佛説十王経」、柱題は「首書十王経」。

・ **十王讚嘆修善鈔** 志水文庫
大本二冊 京 澤田吉左衛門刊（初版は享保元年、京 中村五兵衛・栗山宇兵衛刊）隆堯著

日蓮著との伝説がある『十王讚嘆鈔』を元に、増補された本。著者隆堯は天台宗の僧（後に浄土宗に移る）で、『十王讚嘆修善鈔』が撰述されたのは、跋文によると永享五年(1433)のことであるらしい。十王の本地仏に関する記述が詳しくなり、「法念伝」や「浄土宗の趣旨」など、浄土宗に関わる譬喩譚が増補されている。志水文庫本には、京洛東知恩院古門前石橋町澤田吉左衛門の蔵版目録が付載されているので、享保元年本の後刷本か。

・ **十王讚嘆修善図絵** 志水文庫
半紙本一冊 嘉永六年 京 文昌堂・萬玉堂・文徳堂刊 上巻のみ。

隆堯の『十王讚嘆修善鈔』に図絵を加え、若干の増補をした本。志水文庫本は上巻のみであるが、下巻には浄土真宗の僧徹外による跋文がある。

その他の説経関連書

・ **あいこの若**
説経六段 絵入り十六行 中本

・ **しだの小太郎**
説経 絵入り十七行 中本 享保頃のものとは推定

・ **しやかの御本地**
説経六段 絵入り十七行 半紙本 天満屋八太夫正本（推定）
江戸 鱗形屋孫兵衛 刊

・ **釈尊記（写）**
説経六段 九行 大本 上記「しやかの御本地」とほぼ同文

・ **熊野之御本地**
説経六段 絵入り十六行 中本 天満八太夫正本（推定）
江戸 鱗形屋孫兵衛 刊 破損甚だし 補修済み

・ **熊谷先陣問答** 志水文庫
説経六段 九行 半紙本 享保三年刊 佐渡七太夫豊孝正本

・ **一の谷嫩軍記** 志水文庫
写本 半紙本 一冊
表紙に「勢津教 薩摩太夫／一の谷嫩軍記／太刀打の段／組打の段／首打の段」とある。

・出世景清

志水文庫

写本 小本 一冊 表紙に「説経祭文峯太夫／出世景清牢屋之段」とある。

・荳萱道心

志水文庫

説経祭文 薩摩若太夫正本 六行 江戸吉田屋小吉刊

「花見悟段」「與治物語段」「登山段」「高野山山のたん」「行違のだん」「札捨物語段」上下「萱堂のだん」「札書のだん」「衣懸の段」「御臺病死段」。十一冊の合冊。

・佐渡 説経浄瑠璃竹田座 正本（大浦人形座旧蔵）

志水文庫

写 半紙本 二十三冊

いわゆる三四郎書き。書写者は小田這茂（大職冠を除く）。複数の本に奥書がある。例えば、『日本王代記并神武天皇ノ由来』には、

明治九丙子四月 雑太郡大川村小田這茂写

志水文庫にある正本の曲名は以下の通り

日本王代記并神武天皇ノ由来・頼光跡目論・藤原純朝付式三番・節分記・清原合戦・濱松合戦・末武太田合戦・鋸山合戦・北国合戦・熊井太郎孝行巻・八幡太郎印揃・出世景清・門出八島・大職冠・判官鞍馬登・本朝三国志・百日曾我・文武五人男・酒呑童子枕言葉・孕常盤・曾我会稽山・日本振袖始・姫山姥

いずれも、いわゆる説経浄瑠璃とは異なり、金平浄瑠璃系統と山本角太夫系統あるいは近松作の浄瑠璃であるが、参考資料として展示した。